

英国海損精算人協会2002年 Annual Dinner 出席ありのまま記

(2002年5月9日 Savoy Hotel, London)

—2002年7月11日現在—

- 1、 昨年10月25日、新丸コンファレンススクエアで開催された日本海損精算人協会（以下、A A A J と略称）第44回定時総会で凶らずも第45期会長に選ばれた私は、前任の藤沢順会長および事務局より、毎年5月の第2木曜日に London の Savoy Hotel で開催される英国海損精算人協会 **【注1】** の Annual Dinner に出席することが期待されている旨承っていたので事情さえ許せばそうしなければならないものと考えていた。期待されているだけで、義務でないのは往復の旅費・宿泊費等の全てを自費で賄わなければならないからである。
- 2、 3月18日 A A A の Tim Madge 会長より、5月9日 Savoy Hotel, London にて Annual Dinner が催されることが伝えられると共に、出席の可否につき問合せを受けたので私は出席の意向を伝えおいた。
- 3、 その後4月15日に開かれた A A A J の現行日本海損精算人協会実務規定改定のための勉強会の席で、私が Chairman's Dinner に果たして招待されるか否かが、話題となった。これまでの例によれば、Annual Dinner の前夜に A A A 会長夫妻がアメリカ、カナダ、ヨーロッパ、日本の各会長夫妻を Savoy Hotel に招待しての晩餐会が催され、去年の藤沢順会長ご夫妻はこの招待を受けて出席されたとのことであった。A A A J の事務局としては私が招待されることを期待し、A A A に問い合わせてみると言った。しかし私は今回妻を伴わないこともあり、夫人同伴の晩餐会に私だけ独りでは違和感を与えることになるから、問い合わせしないで戴きたいと表明したが、結局その場に居合わせた人の中で A A A の事務局に親しい人から電話でそれとなく尋ねて見るということになった。
- 4、 5月5日（日）B A 5 便にて 10:55 成田発、同日 14:30 London Heathrow 空港に着いた。私は Heathrow 空港から London までの道ほぼ半ばに位置する Richmond Hill なる Doughty Cottage という Bed & Breakfast（日本の民宿に相当）に3泊の予定で赴いた。節約しながら体調を整えるためである。着いてみたら、私に与えられた部屋は6m×7m位の大きさの寝室と、3m×6m位の浴室で、寝室の天井からは美しいクリスタルのシャンデリアが吊り下げられ、中央に天蓋つきの巨大なベッドが置かれ、寝床の高さは腰程の高さまであり、身を横たえると余りの心地よさに眠りに引き込まれそうになる程であった。室内の家具にはイタリア語の愛の詩が書かれたリボンが鳥が口に挟んでいる図柄が描かれていた。また、浴室には身長180cmの私の体が完全に脚を伸ばして水平に入れる浴槽が置かれ、この浴槽に沿った壁絵のほか、油絵が3枚、それに浴室になぜか籐製の椅子が2脚置かれていた。

このような豪華で優雅なB & Bは私も初めてのことであった。1泊朝食付きで £100であった。

- 5、 6日(月)は Bank Holiday であった。これは東京出発前には知らず、一日計算違いとなった。肌寒い日ではあったが晴れていた。Richmond Hill から遙かに見下ろす一面の緑の中を緩やかに蛇行する Thames River を左にして、



緩やかな坂道を下って行ったところ、Richmond Bridge のたもとに観光船 "YARMOUTH BELLE" (1892年建造) が着桟していた。なんとなくこれに乗り、兩岸の景色を楽しみながら Kingston で別船に乗り換え、結局 Hampton Court まで行ってしまった。



- 6、 7日（火）朝、Richmond Station から District Line に乗り City へ向かった。District Line は途中から地下に潜って地下鉄になる。約45分かかって Tower Hill 駅で下車、地上に出て Mansell Street まで歩き、旧知のある法律事務所を訪問した。幸い私と親しい某弁護士は居た。彼の部屋から A A A Madge 会長に London 到着を電話で報告したところ、翌8日（水）の夕刻 Savoy Hotel 内の Iolanthe Room で開かれる Chairman's Dinner に招待されていることを初めて知った。この招待は私が日本を発つまでには届いていなかった。Madge 会長曰く、暫く前に E-Mail で私の東京の事務所宛に知らせたが返事が無いので心配になって7日の朝（つまり東京時間の7日の夕刻）私の東京の事務所に電話してみたところ、既に私が London に着いていると告げられ私からの連絡を待っていたという。私は訳が分からなかったがとにかく招待をお受けする旨回答した。上述のとおり、東京を発つ前にそのような Dinner が今年も開かれるのか否か、開かれるとしても私も招待されるのか否か気に掛かってはいたが、どこからも知らせに接しなかった。よもや私から、招待されていますかと尋ねることなど思いもよらないので、そのままにして東京を発つてきたのであった。【注2】この日の午後、私は Noble Street なる D 法律事務所を訪れ、ある事件について約2時間半程打ち合わせた後、夕刻 Richmond Hill の宿に戻った。
- 7、 8日（水）この日私は Richmond Hill の宿から Savoy Hotel へ移動した。



Savoy といえば London で屈指の超高級ホテルである。18年程前、一度食事をしたことはあったものの、Savoy へ泊まることなど一生ないと思っていたが、翌9日の Annual Dinner がここで開かれるので、他所に泊まった場合、万が一、不手際があってはならないと思い、東京を発つ前に予約していたものである。もっとも覚悟

をきめてから rate を尋ねてみたら一番安い部屋なら £179 プラス税金というもので、約15年程前から London のホテルは天文学的に高いと思い込んでいた身には少し意外な気がした。

8、5月8日午後6時半より、Savoy Hotel 内 Iolanthe Room で開かれた Chairman's Dinner の模様

Iolanthe Room はロビーから Thames 川の方を向いて緩やかな階段を数段下りたところから左に入る廻廊を進み、突き当たりを右折した先の左側にあった。扉を開けて入ってみたら未だ誰も居なかった。部屋は7m×7m位の個室で、壁も、天井も、カーテンも薄いピンクで統一され、優雅さが演出されている。そして円卓がしつらえられ、中央に生花が飾られている。この日は Business Suits で良いので気が楽だ。やがて Madge 会長が David Taylor 氏と共に現われ、挨拶を交わす。私は初対面だ。A A A J の森明事務局長より予め聞いていたとおり、2人ともとても気さくな人でホッとすする。やがて次々と到着する。全員が揃うまでそれぞれ挨拶をし、立ったままグラスを片手に久闊を叙し、最近の出来事を話している。但し、私は全員に対し初対面なので些か緊張する。David Taylor 氏（私より数歳上、元 Hill Dickinson の弁護士、現在 International Underwriting Association の special advisor の身でA A Aの事務局長を務める）が「私の年代で同窓会に出ると典型的な会話は “Do you have your own hair? How many strokes (脈拍) do you have?” だと言って皆をドッと沸かし、場の雰囲気のを和ませる。カナダA A Aの昨年の会長 David Marler 氏は私より1歳年上だと分かったが、祖父が初代駐日大使だったと言って私に話し掛ける。若いときのハンフリー・ボガードそっくり。

やがて午後7時頃、全員が揃って着席した。Tim Madge A A A会長から時計回りに Hidde Lahaise ヨーロッパA A A会長、Michael Harvey A A A副会長、Lahaise 氏夫人（香港出身、Deborah さん）、David F.H. Marler カナダA A A（前年度）会長、Madge 氏夫人（韓国出身、Eunja さん）、日本A A A会長たる私、David Taylor A A A事務局長、Marler 氏夫人(Jean さん)、Howard M. McCormack アメリカA A A会長の順であった。食事が始まった。その日のメニューは、*Celeriac cappuccino with black truffles, Seared John Dory on vegetable ravioli and herb cocktail, Pear mille-feuilles with blackcurrant sauce or English and French cheese, Savoy blend coffee, Petit Fours*、ワインは *Chablis “Carri de Cisa” J. Durup 1999, Muscat Beaumes de Venise 2000* だった。これが美しい文字で印刷され、絹の黄色の紐と房が付けられて各人の席の前に置かれて優雅な雰囲気を一層高める。



Lahaise 氏夫人の Deborah さんは香港出身の人。Madge 会長夫人の Eunja さんは韓国ソウル出身の淑やかな人。10人の中に私を含めて3人の東洋人が居た。私は円卓の会話を邪魔しない程度の声で右隣の Eunja さんと少し韓国語で話をした。Tim Madge 氏が若い頃、韓国ソウルで数年間海事精算人として勤務したとき知り合って結婚、2人の間に生まれた令嬢がもうすぐ弁護士になるとのことだった。McCormack 氏の話の中で、アメリカのAAAではかつて総会の後、アトラクションでベリーダンスを見せたことがあると言っていた。本当だろうか、それとも私の聞き違いか？ 否、聞き違いの筈はない。

また、McCormack 氏は日本AAAの総会はいつかと私に尋ねるので、10月の第4木曜日だと答えたところ、アメリカAAAの総会は10月第1木曜日なので invitation card を送ると言った。礼儀上からは私もその場で各国AAAの会長に日本のAAA総会への招待状を送ると言うべきであったかもしれないが、日本でどれだけのもてなしができるのか心もとないので、帰国後事務局と相談してみなければならぬと考え、私はこの点については沈黙を守っていた。愛想がないと思われたかもしれない。和やかな雰囲気の中に午後10時半頃散会。

- 9、この Chairman's Dinner の席で私は翌9日の午前10時半から Baltic Exchange で AAA の Annual General Meeting が開かれ、その場で Hull cover on UK, American and Norwegian Market Insurance Conditions — Some of the Differences and Advantages という演題でパネルディスカッションがなされることを初めて知った。これも本稿冒頭に記した E-mail が私に届いていれば4月19日の時点で分かっていた筈のことであった。

これには聊かとまどった。なぜなら、私はこれまでに船舶の衝突、座礁、沈没、

火災、貨物に生じた損害、海難救助などの分野ではそれなりに経験をつんできたが、船舶保険金の請求事件というのは扱ったことがなく、また船舶保険の営業に至っては全くの門外漢だからである。

そこで A A A J 事務局の森さんに援助を求めた。この FAX を発信したのは London 時間の、正確には 9 日の 0 時 17 分であった。

10、 翌朝 5 月 9 日（木）起きてみたら、東京の森さんから資料が FAX で届いていた。

一つは、森さんが東京海上の井口俊明さんから取り寄せて下さったもので、Lloyd's List（日刊誌）2002 年 4 月 15 日 James Brewer の “Insurers consider giving marine policies anti-fraud clauses” という切り抜き記事であり、もう一つは同じ Lloyd's List の 2002 年 4 月 29 日付同じ James Brewer の “London to review shunned Institute Time Clauses” という切り抜き記事であった。

前者は昨年 House of Lords から出された Star Sea 事件判決で、M I A 第 17 条の最大善意の原則は保険契約が成立した後のクレーム請求に対しても適用されるが、被保険者が保険者を相手取って訴訟を提起した時点以後は適用されない（通常の訴訟ルールに従う）と判示されたが、保険者としては最大善意の原則はクレーム請求全般に対して適用すべきと考えていることから、この旨を保険約款に明記することを検討中であることに関するものであり、後者は 95 年に大改定された船舶保険約款が船主に不利であるとの批判から使用されず、83 年約款がいまだに使用されている現状に鑑み、95 年約款の内容全般の見直しが行なわれていることに関するものであった。

11、 午前 10 : 30 から BALTIC EXCHANGE で THE ANNUAL GENERAL MEETING OF THE ASSOCIATION が開かれた。私は全体の進行状況を見届けたいと思い、最後部に着席した。続々と詰めかけ、約 120 名位が参集した。議事は最初に会計報告が承認された後、Tim Madge 会長の 2002 ~ 2003 年へ向けての再任が決まり、それからパネルディスカッションへと移っていった。ひな壇の中央に Madge 会長が着席、向かってその左に McCormack アメリカ A A A 会長、そして右に Norwegian Hull Club の Claim Manager Per-Age Nyrgard 氏が着席、アメリカの A I T C H、ノルウェーの船舶保険についての最近の状況と問題点が要領よく述べられる。Howard McCormack 弁護士の歯切れのよい講演が印象的だった。（12 時半頃まで）

この講演が一段落して Madge 会長から会場に向かって「Any questions?」の声が掛けられたとき、ヨーロッパ海損精算人協会の Lahaise 会長とカナダ海損精算人協会の Marler 前年度会長から前夜 Savoy Hotel Iolanthe Room における Chairman's Private Dinner と、この Baltic Exchange におけるパネルディスカッションの意義深いことに対する謝辞が述べられた。私はこの日の夜の Savoy Hotel における Annual Dinner で謝辞を述べる機会があると思っていたので黙っていたが、後でこの推測が間違っていたことを知る。かくして謝辞を述べる機会を失ってしまった。

AAAJのため申し訳なき仕儀であった。

- 12、 Annual General Meeting が終わって Baltic Exchange の入口に出たとき Richard Shaw 弁護士に出くわした。Richard Show 弁護士は私が1973年夏、London の Elborne Mitchell 法律事務所で1ヶ月研修したとき、そこの3番目のパートナーであった。その数年後独立して Shaw & Croft を設立し、活躍していた。10年程前リタイアし、今は Southampton Univ. の教授として海法を講義する一方で、海法に関する幾つもの国際会議で英国政府の代表委員を務めてきた。lunch に誘って貰ったのでこれを受け、Baltic Exchange の食堂で29年前の思い出と、その後それぞれ歩んできた途について話は尽きなかった。
- 13、 Mansell Street の某法律事務所に立ち寄り、H弁護士の援助を得て、もし必要なときになす挨拶の言葉を考えた。
- 14、 午後4時頃 SAVOY へ戻り、シャワーを浴びて着替え。
- 15、 招待状には6時半からとなっていたが、少し早めの午後6時15分 Savoy Hotel 内 Thames 川寄りの Annual Dinner 会場に着き、入り口で Madge 会長の挨拶を受ける。もう数十人が集まっていた。このとき入り口付近で Table Plan (着席表) を貰った。虫眼鏡を用いなければ見えないような小さな活字で約260人分の着席位置が印刷されている。

この待ち合わせの会場でグラスを片手に立っていると、次々と集まる人波でみるみるうちに会場は人で溢れ、熱気で暑くなり、冷房が欲しくなる程であった。約250人のタキシード姿の男性と約10名のイブニングドレス姿の女性が或いは歩み、或いは佇んで声高に話すのは一種の壮観である。やがて7時頃、階下の Dinner 会場へ移動を求めるアナウンスが聞こえたが、グラス片手に声高に話し合う熱気は静まろうことか、動く気配も感じられなかった。3回目のアナウンスで、それまで張りつめていた人の波が漸く引き潮の如く階下の会場へ消えていった。
- 16、 宴会場は35m×40m位、天井高は6mもあろうか。宮殿のようであった。そこにEの字の横棒を7本にした形に食卓と椅子がセットされ、Madge 会長は縦棒の中央に位置し、私に与えられたのは縦棒の右半分の15人中の11番目であった。【注3】

着席してみると、私の左は Mr. Justice David Steel、右はAAAの Honorary Treasurer の Mr. Christopher Barstow。食事に先立って Madge 会長のみが立ち上がって極く短く挨拶の言葉があり、このときアメリカAAA会長、カナダAAA会長に続いて日本のAAA会長たる私の名前が呼び上げられた。乾杯の音頭にあたる儀式はなく、そのまま食事が始まった。Justice David Steel は席に着くなり私に話し掛け、日本の皇室・政治・経済のこと、私の子供のことについて私に尋ね、そして彼の子供のことや、彼の父は昔ICIに勤務していて1950～60年代日本に頻繁に行っていたこと、いつか自分も日本に行ってみたいと思っていることなど約1時

間、実にはこやかに話してくれた。背が私より7～8cm高く、容貌はキッシンジャーに似ていて、とても人なつこく話してくれた。私はSteel判事の最近の判決を話題にしないと礼を失するかと考え、The Abt Rasha号事件判決の名をちょっと出して見たが、Steel判事は「昨日言い渡した判決も、もう全て忘れているものですよ。ワッハッハッハ。」との反応だったので、このような場でこのような話題を持ち出すことの方が礼に失するとのお考えだと受け止め、私はすぐさま話題を変えた。

このときのメニューとワインは以下のとおり。

Chartreuse of scallops with vegetables

Saint Veran Roger Luquet 2000

Frothy red bean cappuccino with truffle oil

Tournedos of beef in red wine and shallot sause,

rondelles of vegetables and fondant potatoes

Rasteau Villages Domaine de la Soumade Andre Romero 1999

Bread and butter pudding soufflé with vanilla ice-cream

Savoy blend coffee

Petits fours

Taylor's Late Bottled Vintage NV

Fine VSOP NV

Cigars

約1時間程経った頃、Madge会長が立ち上がり、全員が起立して“To the Queen”の掛け声で全員が乾杯、一旦着席して5分程後、再びMadge会長が立ち上がり、全員が起立して“Prince Phillip the Duke of Edinburgh, The Prince of Wales and other members of the Royal Family”の掛け声で全員が乾杯。

右隣のBarstow氏(AAAの会計担当)は私に日本経済に回復の見込みがあるか否かについて尋ねてきた。私はこの260人もの人の晩餐会費用をどうやって工面するのか気になったので尋ねた。同氏によると、Eの字の縦棒に着席する30名は招待されているので会費を支払わないが、Eの字の横棒7本に着席している230名からは会費を徴収しているとのことであった。またこの日の食事とワインを決めるために何度も何度も試食と試飲を重ねたとのことであった。

食事が殆ど終わった頃(予め定められた)4人が次々とスピーチ。その形式は、

THE INSURANCE FRATERNITY

Proposed By Mr Richard Cornah, Fellow

Mr David Cobb CBE, to reply

THE GUESTS AND SUBSCRIBERS

Proposed by Mr David Pannell, Fellow

Mr Alan Cleary, to reply

というものであった。

最初の joke は「友人から君は何をしているのかと尋ねられ、私は average adjuster だと応えたら、なんだ average か、good adjuster ではないのかと言われ、面目を失った。average adjuster という名称を何とか変えられないものか。」という他愛のないものであったが皆ドッと笑っていた。しかしその後 joke は次第に難しくなり、特に最後のスピーチは恐らく約30の jokes の連続で残念ながら私には5%位しかわからなかった。しかしその私にもかなり猥雑な joke が出ていることは分かった。【注4】私はイブニングドレスの女性も居るのにとハラハラした。しかし圧倒的多数の男性群は次々にドッと笑って咎められていなかった。それでも横目で私の左隣の方を見てもなく見ると、10回に1回位しか笑いに追随していなかった。このあたりエチケットの個人的基準により微妙なところなのかもしれない。

かくして10時55分頃、壮大なる Annual Dinner は散会となった。ヨーロッパ各地やアメリカから参集した何人かはこの後もそれぞれ旧知の友人と場所を変えて話すのであろう。私はいささか疲れたので自室に引き退った。

- 17、翌朝 Savoy Hotel をチェックアウトした後、前夜の宴会場を訪れてみた。宴会場ではもう次のファンクションのために10数人の作業員が椅子やテーブルを動かしていた。せめて部屋の壁だけでもと思い、1枚写真撮影した。



以 上

[注1] 英文表示では単に Association of Average Adjustersといい、United Kingdom とかは付けないようである。以下、AAAと略称する。

[注2] 帰国してからこの点につき調べた結果、ちょっとした手違いで私に届かなかったことを知った。つまり、Madge 会長の E-Mail はなぜか私の E-Mail address でなく、私の事務所のある者が用いている複数の E-Mail address のひとつに受信されていた。しかしその者にとってその E-Mail の発信人は知らない人であったのでウイルスが怖くて開けなかったという。当事務所が依頼している Computer Expert は以前より身元のはっきりしない E-mail 着信の添付書類はウイルス防止のため開けないように助言していた。

[注3] E字の縦棒の右側に席を与えられたのは、中央の Madge 会長から順に Lord Donaldson of Lynton、IMO Secretary General の William O'Neil、BIMCO President の Michael Everard CBE、Hon Lord Justice Mance、Maritime London 会長の David Cobb CBE、AAA 副会長の Michael D. Harvey、Lord Justice Evans、The Baltic Exchange 会長の Peter Kitching、Joint Hull Committee 会長の Simon Beale、Mr. Justice Steel、日本AAA会長たる私、AAA Honorary Treasurer Christopher Barstow、Canadian AAA直前会長たる David Marler、CMI President の Patrick S. Griggs、Salvage Association 会長の Bernard Devereese。E字の縦棒の左側に席を与えられたのは、中央の Madge 会長から左へ向かって Lord Phillips of Worth Matravers、U.S. AAA会長の Howard McCormack、Lord Justice Clarke、Alan Cleary、Admiralty Solicitors Group 会長の Richard Sayer、AAA Honorary Fellow の Geoffrey Hudson、U.S. Maritime Law Association会長の Raymond P. Hayden、AAAの Charles S. Hebditch、International Group of P&I Association 会長の Stephen James、ICS Insurance Committee 会長の Mathew Los、CMI IWG York-Antwerp Rules Review 会長の Bent Nielsen、Joint Hull Committee の直前会長 David Davies、Society Consulting Marine Engineers & Ship Surveyors 会長の Capt. J.V. Wallace、FCMS、Intercargo Secretary General の Roger Holt であった。この30人から構成される雛壇の中にアメリカ、カナダ、日本の海損精算人協会の会長が含まれるのはいわば当然であるが、他の顔触れを見ると、英国の海事法廷からも数名の裁判官が招待されているほか、およそ海運を支えるあらゆる業種の団体の代表者が世界中から参集している感を受ける。これらの中にあって私1人が裸の王様であった。

[注4] joke の全ては理解できなくとも、幾つかの単語はピックアップはできることがある。その幾つかの単語から推定される内容をこの原稿に活字にすることは・・・二考三考したが・・・やはり差し控えたい。仙酔の境の風に運び去されるべきものというべきか。

<反省の弁>

主催者側は260名からの参会者との連絡で大わらわであることを思えば、AAAJの会長として招待される私はAAAから何か言ってくるまで黙っているというのではなく、むしろ積極的にこちらから「Annual Dinner 以外にも私が参席することが期待されている場があるのか」とか「私にいつ、どこで、どうして欲しいということがあったら遠慮なく言って下さい。」と何度でも申し出るべきであったと考える。そうしてさえおれば、些細な通信上の手違いで発言の機会を逃すこともなかったであろう。